

[Article]

## **The Original Japanese Expressions (Yamato-Kotoba) of Human Body and Physical Recognition of the Ancient Japanese People (The Knee Region)**

Toru Noda\*

\* Faculty of Rehabilitation, Department of Occupational Therapy, Biwako Professional University of Rehabilitation

### **Abstract**

The Japanese anatomical terminology was made by applying the traditional Chinese medical terminology (Kampo Medicine) to the translated Western anatomical terms in Meiji period. The author is trying to identify the original Japanese expressions of human body parts without the historical influences from Chinese and Korean culture in order to understand the physical recognition conceived by the ancient Japanese people. In this study, the author collected and examined “Yamato kotoba” expressions of the human “knee” region in “Wamyoruijusho” and “Shinsenjikyo” which were the encyclopedia and the dictionary of Chinese letters respectively, both compiled in Heian Period. The patella was called as “ahatako”, “hisanokahara”, and “hisakaminoahata” and popliteal region was called as “yohoro” and “utsuashi” at that time. These structures have been assumed to recognize as the important because the muscles or tendons in the regions were often cut as the legal and also illegal punishment. The examples of these expressions used in Japanese classical documents are shown and are interpreted from the present anatomical point of view.

**Key Words :** Yamato kotoba, knee, patella (ahatako), popliteal fossa (yohoro)

## 大和言葉による身体表現と古代日本人の身体観（膝周辺の古語）

野 田 亨\*

### 【要 旨】

本研究は古代の日本人が使っていた人体各部を表した大和言葉を過去の文献から探し出し、その語彙が示す身体部位について解剖学的視点から検討しようとするものである。膝周辺の構造について、平安時代以前に「ヒザ」以外の多様な言葉が存在していた。それらは「アハタ（コ）」、「ヨホロ」、「ウツアシ」などである。それらに関わる筋（腱）はそれぞれ「アハタコノスズ」、および「ヨホロスズ」と呼ばれ、当時の人々はそれらを切断することで歩行不能になることを知っており、そうした刑罰が存在していた。後膝部の名称であった「ヨホロ」という語は、律令制のもとで成人男子を示す「丁（ヨホロ）」、その他の職名をしめす多くの語を生んだ。さらに古代日本語の名残を残す東北地方や琉球方言を見ると、古代日本語の「ヒザ」の表す範囲は現在とは異なっていた可能性がある。こうした膝に関係した大和言葉の用例を示しつつ、古代日本人の身体観を考察する。

キーワード：大和言葉、膝、アハタ、ヨホロ

現在、日常的に用いる膝周辺の名称は「ひざ」以外に適切な語彙がない。膝頭（ひざがしら）、膝小僧（ひざこぞう）、あるいは膝のうしろは「ひかがみ」とよぶことがあるが、それほど一般的な語彙になっていない。解剖学では、膝関節、そしてそれを形成する大腿骨、脛骨、膝蓋骨などの骨の名称は一般的であるが、膝周囲表面の体表解剖学用語としての前膝部（膝蓋部を含む）、後膝部（膝窩部を含む）という用語は<sup>1,2)</sup>、皮膚の傷の部位などを表現する場合以外には用いられることはなく、あまり一般的に用語ではない。しかし、本稿では、膝関節の前面と後面を区別して論ずるために、あえてこの前膝部と後膝部という表現を使用することにする。

本稿では、主として平安時代に書かれた倭名類聚抄と新撰字鏡の中の膝に関する語彙について、上代か

ら中世にかけて書かれた文字資料の中にそれらの語彙の用例を求め、それらに解剖学的な視点から解釈を与えた。なお、本稿では、各用語にカタカナ表記とひらがな表記を併記している場合があるが、主としてカタカナ表記は大和言葉が万葉仮名で書かれた読みに近い表現を意図し、ひらがな表記は現代の意味に沿った表記を意図したものである。

### 前膝部に関連した古語

#### 1. ヒザ

古事記や日本書記などの古代の資料を見てみると、現在では使用されていない身体表現が認められる。本稿では平安時代に作成された百科辞書である倭名類聚抄、ほぼ同時期に編まれた漢和辞典である新撰字鏡な

\* びわこリハビリテーション専門職大学リハビリテーション学部作業療法学科

どから膝に関連した語彙を書き出し、それらの用例を可能な限り、文字資料で示した。

倭名類聚抄、および新撰字鏡からの引用表記は、

見出し漢字→万葉仮名表記→読み（カタカナ）→  
現代の対応語

の順で記した。

【用例 1】 倭名類聚抄 卷 3 形体部第八 手足類  
第三八<sup>3)</sup>

膝（見出し漢字）：比佐（万葉仮名表記）→ヒサ  
（読み）→ひざ（膝）（現代の対応語）

この用例から平安時代、およびそれ以前も膝を「ヒサ」と呼んでいたことがわかる。しかし、膝がどの部分を表しているかは、この注の「脛頭也」から現在の膝と同じらしいことはわかるが、厳密には膝関節の前面か、後面かも不明である。後に述べる【用例 11】の記述から、膝は前面を指すことが明らかとなる。

【用例 2】 日本書紀 卷第六 垂仁天皇<sup>4)</sup>

時に天皇、皇后の膝に枕して昼寝したまふ。

この膝に関わる同様の話は、古事記にも見られる。膝枕は現在でも用いる表現であるが、実際は膝ではなく、大腿（もも）前面の部分であるにもかかわらず膝と表現している。また現在でも「子供を膝の上にのせる」などとも表現する。こうした表現から、既に日本書紀が書かれた奈良時代から現代と同じように大腿前面の一部をも膝とも呼ぶ習慣があったことが了解される。

【用例 3】 古事記 下つ巻 顕宗天皇<sup>5)</sup>

初め天皇、難（わざわひ）に逢いて逃げたまひし時、その御糧（みかれひ）を奪ひし猪甘の老人を求めたまひき。こを求め得て、喚上（めさ）げて、飛鳥河の河原に斬りて、皆その族（うがら）の膝の筋（すぢ）を断ちたまひき。

ここで書かれている「膝の筋」は、現代から見ると、膝蓋骨に結合した前面の大腿四頭筋か膝蓋靭帯、あるいは後面のハムストリングスの筋群を想像するかもしれないが、【用例 11】における、膝とヨホロの対比から、膝は前面を指しているのので、「膝の筋」は大腿四頭筋か膝蓋靭帯のいずれかに限定される。この文章から、古事記が書かれた時代にすくなくとも刑罰の一つ

として膝の腱や靭帯を切る行為が行われていたことがわかる。

## 2. アハタ

膝の前面には膝蓋骨があるが、平安時代には、その骨の名称と思われる表現に「カハラ」や「アハタ」という言葉が用いられている。

【用例 4】 倭名類聚抄 卷 3 形体部第八 手足類  
第三八<sup>3)</sup>

膝髀：比佐乃加波良→ヒサノカハラ→膝蓋骨  
髀：阿波太古→アハタコ→(膝骨也)→膝蓋骨  
阿波太→アハタ→(膝骨也)→膝蓋骨

「ヒサノカハラ」は、「カハラ」をそのまま「瓦」状、平板状の物体と解釈し、「膝の瓦」のように解釈される。

【用例 5】 新撰字鏡 骨部 第三十一<sup>6)</sup>

髀：比佐加美阿波太→ヒサカミノアハタ→(膝之骨也)→膝蓋骨

上記、【用例 4】の「アハタコ」、又は「アハタ」は膝骨との説明があり、膝蓋骨であろうと推測できる。また【用例 5】については、「ヒサカミノアハタ」は「ヒサ+カミ+ノ+アハタ」と分解できるので、膝の上の「アハタ」と解釈でき、やはり膝蓋骨に相当する。「アハタ」という語がなぜ膝蓋骨を意味する言葉となったのか、その語源は明らかではないが、賀茂氏は、「アハタ」が、「ア（足）」+「ハタ（端）」の二つの語が組み合わせられ、形成された語と考えている<sup>5)</sup>。「ア」は足の古い表現であり、「ハタ」があるものの両端やそばを表すと解釈すれば、こうした語源解釈も可能であろう。

【用例 6】 倭名類聚抄 卷三 形体部第八 頭面類  
第三十<sup>7)</sup>

顛：「加之良乃加波良」→「カシラノカハラ」→(脳蓋也)→頭蓋骨

倭名類聚抄には「カハラ」と呼ぶ身体用語は、他に「カシラノカハラ」という語彙があり、これも「脳蓋也」との説明があるので、「頭の瓦」、すなわち頭部にある瓦状の扁平骨である頭頂骨などの頭蓋骨と捉えることができる

「アハタゴ」には鎌倉時代の塵袋にも言及があり、その部分は以下の通りである。

【用例7】 塵袋 第六<sup>8)</sup>

一 ヲサナキモノヲヒザニノセテ、アエサゴノヒエサゴト云フハ如何 アエサゴニハアラズ、アハタゴナリ。ヒザガシラトイフ所ヲバアハタゴト云フ。臏トカケリ

こちらの用例には、現代の編者の注があり、字類抄を引用し、「臏をアハタコ俗云アハタ、又作、臏・膝(骨偏に阿)(ヒサカハラ)也り」としていることから、骨偏の「臏」は膝蓋骨に相当し、肉づきの「臏」はそれについている筋(又は腱)、現在の大腿四頭筋が膝蓋靭帯を表すと考えられる。塵袋の筆者は、この後に日本書紀の記述を引用しているが、その日本書紀の部分は以下の通りである。

【用例8】 日本書紀 卷第九 神功皇后 摂政前紀<sup>9)</sup>

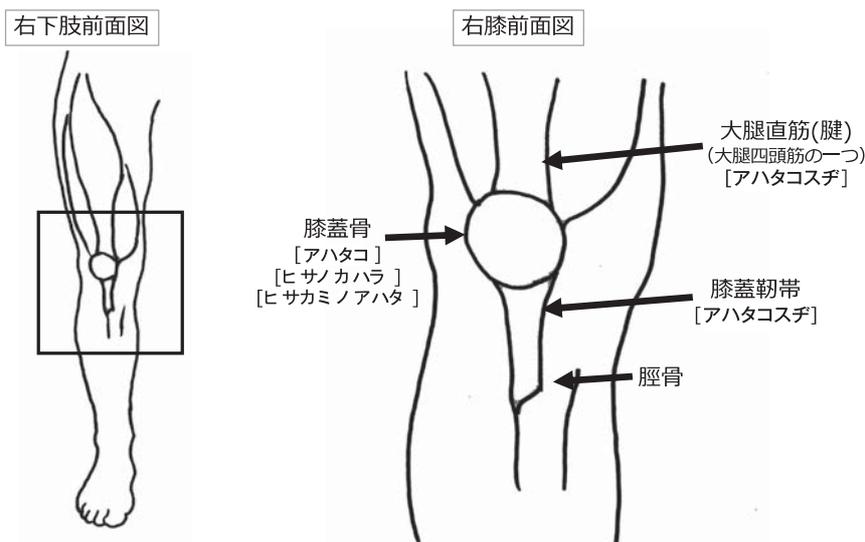
一に云はく、新羅の王を禽獲(とりこ)にして、海辺に詣(いた)りて、王の臏筋(アハタコスヂ)を抜きて、石の上に匍匐(はらば)はしむ。

解剖学では、膝蓋骨は大腿四頭筋とそれに続く膝蓋靭帯との間に位置する扁平な骨(種子骨に分類される)を指し、膝関節の屈曲、伸展に伴い膝関節上を滑る骨である。この骨には上から大腿部から大腿四頭筋

(大腿直筋、内側広筋、中間広筋、外側広筋)という4つの筋肉が一体となって結合している。中でも大腿直筋は前面にあり、腱となって、互いに横に繋がった他の3つの内側広筋、中間広筋、外側広筋のうち、特に中間広筋の上から重なって膝蓋骨に停止している。これに対して膝蓋骨下部では一本の膝蓋靭帯が脛骨に結合している(図1)。【用例8】の臏筋(アハタコスヂ)が膝蓋骨の上部の腱か、下部の腱のどちらを指すのかは定かではない。また「臏筋を抜く」という表現もそのまま筋や靭帯を取り出すというよりは、膝蓋骨ごと抜き取ると解釈するのが妥当であろう。

膝蓋骨を取り去ることは、中国では「臏刑」という刑罰として古代から存在していたようである<sup>10)</sup>。兵法書として有名な「孫子」は孫武によって書かれたものであるが、孫武より約100年後に現れた孫臏も優れた兵法書を書いたとされている。彼についての逸話は司馬遷の史記列伝に書かれていて、ライバルであった龐涓から罪をきせられ、「臏刑」を受け、両足を切断されたといわれている<sup>11)</sup>。そのことに因んで彼の名前も孫臏と付けられたのかもしれない。臏刑には膝蓋骨だけを抜き取られるものと下肢を切断するものの両方があったようである。

日本では奈良時代に大宝律令や養老律令が發布され、刑罰は五罪八虐で定義された。八虐ではどのようなことが罰せられることなのかが示され、五罪では笞、杖、徒、流、死のどれかの手段で罰せられるかが示されているが、上記の臏刑のような刑罰は日本の律令制には



図の右に枠で囲った部分の拡大図を示す。膝蓋骨、および膝蓋骨に結合する筋や腱の古語を示す。膝蓋骨上部には大腿四頭筋が停止するが、大腿四頭筋の一つである大腿直筋は特に独立した腱を有する。したがって、膝蓋骨下部に結合する膝蓋靭帯とともに、「アハタコスヂ」と呼ばれた可能性がある。

図1 下肢(右)前面図

存在しない。したがって、日本書紀の記述は、律令成立以前に古代中国と同様の刑罰が日本に存在していた可能性を示唆する。

文字資料ではないが、古墳時代の大大上野原横穴墓群の遺跡から出土した人体骨格の中には膝蓋骨を欠いた例がある。その一つの解釈として、埋葬者が死者の蘇りを恐れ、死者の魂が歩けないようにするために、葬る際に意図的にその膝蓋骨を抜き取った可能性がある」と考古学者の土生田氏は推測している<sup>12)</sup>。このように日本でも既に古墳時代に膝蓋骨の切除によって歩行不能となることが知られていた可能性がある。

## 後膝部に関連した古語

### 1. ヨホロ

膝の裏側にあたる部位は倭名類聚抄では、「ヨホロ」と呼ばれる。

【用例 9】 倭名類聚抄 卷 3 形体部第八 手足類第三八<sup>3)</sup>

脛：與保呂→ヨホロ，ヨボロ→(曲脚中也)→膝窩，ひかがみ

この記載の注として「曲脚中也」とあるので、膝の後面のくぼみ、解剖学でいう膝窩と解釈できる。しかし、ここで注意しなければならないのは、現代の我々は、膝窩、ひかがみを後膝部、膝の後面のくぼみ、あるいは膝窩と呼び、「膝」という文字を使って表現しているが、大和言葉では、一切、膝の文字は用いていないという点である。言いかえれば、あくまで「膝」は前面を指し、後面は「脛（ヨホロ）」と呼んで、厳密に区別されていたのである。

【用例 10】 東大寺奴婢籍帳 天平勝宝二年九月<sup>13)</sup>

奴安居万呂 与保呂久保 (ヨホロクボ) に支比禰 (シヒネ) 在り。

「支比禰」はいわゆる「こぶ」のことで、この安居万呂という奴はヨホロのくぼんだところにコブがあることが特徴とされたと読める。この文章から、「ヨホロ」は「ヨホロクボ」と同義であったのか、あるいは「ヨホロ」というより広い範囲の中のくぼんだ部分を特に「ヨホロクボ」と呼び、両者が区別されていたのかのいずれかであることが考えられる。

【用例 11】 日本書紀 卷第十一 仁徳天皇 六十五年<sup>14)</sup>

飛驒国に一人有り。宿讎 (スクナ) と日ふ。其れ為人 (ヒトトナリ)、體 (ムクロ) を壺 (ヒトツ) にして両 (フタツ) の面 (カホ) 有り。面各 (オノオノ) 相背 (アイソム) けり。頂 (イタダキ) 合いて項 (ウナジ) 無し。各手足有り。其れ膝有りて脛 (ヨホロ) 踵 (クビス) 無し。

【用例 11】では二人の身体が背中合わせに結合してひとつとなった特異な体型の人間が描かれている。頭は後頭部が合体して、互いに反対に向いた二つの顔を持っている。首も背面どうしついているので項 (うなじ) が無い。胴体 (ムクロ) は1つとなっていて、足も後面どうし合体しているために、膝はあるが、脛「ヨホロ」や踵 (クビス=かかと) は無い状態である。この記述から、通常の足の前膝部は「ヒサ」、後膝部は「ヨホロ」と呼び、両者は明確に区別されていることがわかる。

【用例 12】 養老律令 戸令<sup>15)</sup>

凡そ男女は、三歳以下を黄と為よ。十六以下を小と為よ。廿以下を中と為よ。其れ男は、廿一を丁と為よ。六十一を老と為よ。

後膝部と同じ「ヨホロ」と読む「丁」は、古代の律令制の戸籍簿に一定の年齢の男性の成人に対して使用されている名称となっており、各 21 才以上の男子を「丁 (正丁)」としていたことがわかる。

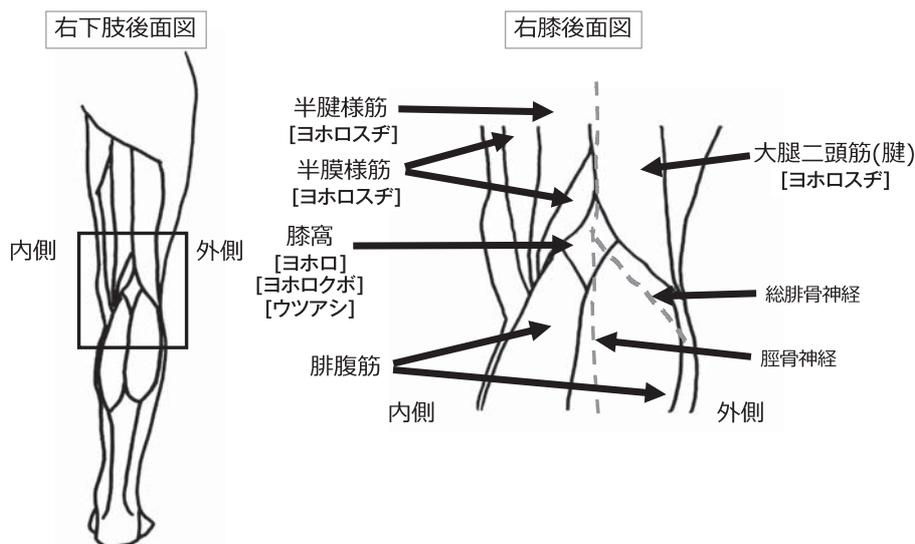
【用例 13】 新撰字鏡 月部 第四<sup>16)</sup>

脛：与保呂乃須知→ヨホロノスチ、脛筋

「ヨホロノスチ (脛筋)」とは、解剖学的に表すと、「ヨホロ」周囲の「スチ」、すなわち膝窩の周りにある腱や筋で、しかも体表から触知できるハムストリングスと総称される筋や腱を指すものと思われる。

【用例 14】 今昔物語 卷第五 僧伽羅五百の商人、共に羅刹国に至れる語<sup>17)</sup>

此の籠めたる所は鉄 (くろがね) を以て四面を固めたり。脛筋 (よほろすじ) を断たれば可逃 (のがるべ) き様無し。穴悲し。疾々 (とくとく) 逃げたまへ。



図の右に枠で囲った部分の拡大図を示す。膝窩部は周囲の筋で囲まれた、菱形のくぼんだ部分を指し、膝窩の上部は内側から半腱様筋、半膜様筋の2筋が重なりあって脛骨に停止している。外側からは大腿二頭筋が腓骨に停止している。これら3筋はまとめてハムストリングス筋と総称し、すべて「ヨホロノスヂ」と呼ばれた可能性がある。膝窩の下部では、内側には腓腹筋内側頭が、外側には腓腹筋外側頭がハムストリングス筋の下に潜り込んでいる。膝窩の深部には、坐骨神経から分かれた脛骨神経と総腓骨神経が走行する。

図2 下肢(右)後面図

【用例15】 水鏡 下 称徳天皇<sup>18)</sup>

清磨帰参りてこの由を申ししかば、道鏡大きに怒りて、清磨が官を取り、大隅の国へ流し遣はして、よほろすぢを断ちてき。

【用例14】、【用例15】では、「ヨホロノスヂ」と呼ばれていたものが「ヨホロスヂ」と変化していることがわかる。この「ヨホロスヂ」を切断する話は複数知られているが、律令制にはない刑罰なので、いわば私刑として行われたのであろう。ハムストリングスは膝窩の内側に半膜様筋と半腱様筋の腱が、そして外側には大腿二頭筋の腱が皮下に浮き出るので容易に触知できる(図2)。これらの筋や腱は膝関節を曲げる作用を持ち、これらを切断することで容易に人を歩行不能にさせることができる。

【用例16】 医心方 卷二 手部左右諸穴百二十<sup>19)</sup>

臂臑二穴 左肘上七寸臑(テノヨホロノ)肉端

医心方には上記の「臑」部分に「テノヨホロ」という訓点がかかれている。上記のように「ヨホロ」は膝の後ろのくぼみであり、足の一部を表す表現であるが、上肢を下肢と相同の構造と見なすと「テノヨホロ」は、肘のくぼみに相当することから、解剖用語の肘窩に相当すると考えられる。こうした表現は現代の我々にはない発想で、ユニークな古代人の身体観が垣間見られ

る非常に興味深い表現である。

2. ウツアシ

この語は倭名類聚抄にはないが、新撰字鏡に見られ、「ヨホロ」と同義の語となっている。

【用例17】 新撰字鏡 月部 第四<sup>20)</sup>

臑：宇豆阿之→ウツアシ→(曲脚中也)→ひかがみ、膝窩

これは注に「曲脚中也」とあり、「ヨホロ」の場合と同じで、膝関節の曲がる中心、膝窩と解釈できる。言海ではその語源を「内足の義」としている<sup>21)</sup>。これは「ウツ」を「うつむく」や「うつぶせ」と同様に屈曲する面を「内(うち)」、その反対面(前膝部)を「外(そと)」と捉え後膝部が「ウツアシ」とよばれるようになったのであろう。

「膝」に関係した古語の音韻と関連する方言の示す領域

日本の各地には、古い日本語の特徴を残した言葉が存在する。古い日本語では「は行」の発音は、現在とは異なった発音であったといわれる。室町時代にポルトガル宣教師によって編纂された日葡辞書では「は行」の音は、いわゆる無声両唇摩擦音として「f音」

で表されている<sup>22)</sup>。すなわち、すくなくとも室町時代には「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」は「ファ、ファイ、フウ、フェ、フォ」というように発声されていたということ推測される。さらに時代を遡ると、奈良時代には、いわゆる無声両唇破裂音である「パ、ピ、プ、ペ、ポ」と発音していたようである<sup>23)</sup>。また「さ行」のサの音韻も「サ」、「ツァ」、「シャ」、「チャ」などの異なる音が在りえたようである<sup>24)</sup>。こうした上代古語音韻の特徴は東北地方や琉球地方の方言の中に残っている。例えば東北地方に膝蓋を「フィチャカブ」という、「ひざ」の古い日本語の発音 (f) を残した呼び方をしている地域があることは興味深い<sup>25)</sup>。

#### 【用例 18】 琉球語辞典 fis[j]a の項<sup>26)</sup>

汝が我思いて 鳴きゃんてやり蚊 片足も出ぢや  
す暇や無らぬ。

Jaa ga wan umuti načan tei, gazjan, kata-fis(j)a n  
nzjasu fima ja neran.

(蚊よ、お前が私を慕ってないたとて、(蚊帳から)片足も出す暇はないぞ。)

この用例からも、琉球沖縄地方でも「ヒサ(膝)」と推定された古代の日本語と酷似した音韻を持つ「フィシャ」が足を意味することから、古代日本語でも「ヒサ(フィシャ)」が足全体を表していた可能性をうかがわせる。一方、沖縄地方では、膝は「チンシ」という<sup>26)</sup>。

大分地方では、「ユウロ」という方言があり、古代大和言葉の「ヨホロ」との関係が示唆されるが、実際には「ふくらはぎ」を指し、用語が示す部位が変化しただと考えられる<sup>27)</sup>。

#### まとめ（古代日本人の身体観を含む考察）

ここまで膝周辺に関する古代の日本人が使用していたと考えられる語彙を用例とともに挙げた。身体語彙については、日本語の語彙史研究の立場から、前田<sup>28)</sup>、宮地<sup>29)</sup>らの研究があり、特に膝に関しては、新野の詳細な研究<sup>30,31)</sup>が挙げられるが、大和言葉の身体語彙に関する解剖学的視点からの検討はなされていない。本研究はこのような身体語彙の解釈に新しい視点を提供するものである。

##### 1. 「膝」という名称について

現在、「膝」は前膝部のみを指す言葉である。現代

の体表解剖の解剖書では、前膝部と後膝部という用語が記されているが、これらは、英語の“anterior or posterior region of knee”を日本語に翻訳した用語であろうと思われる<sup>1,2)</sup>。こうした用語は日本語の「膝」の語意を膝関節の前面のみならず、後面をも指す用語にも用い、「膝」という用語をより広い範囲で用いている。しかし本稿で見えてきたように、少なくとも古い大和言葉では、あくまで前膝部は「ヒザ」であり、後膝部は「ヨホロ」であり、全く異なった言葉で表現しており、この点は古代人の身体観の特徴と言える。現代ではこの部分に適当な用語がないために、大腿骨と脛骨との間の関節をあえて「膝」関節と表現し、「ヨホロ」と呼ばれていた部分に対しても、本来、この関節の前面で使われていた「膝」という語を用いて、「膝窩」や「後膝部」などの語を用いているのは、多少無理があると言わざるを得ない。

現代の日常生活において、膝枕のような慣用句として大腿前部も「膝」と呼ぶことがある。また「膝を抱く」、あるいは「膝をかかえる」などの表現は膝関節を屈曲させた足全体を抱いているし、「膝を組む」とは、下腿（膝より下の部分）を交叉させることであり、「足を組む」とも表現する。このような「膝」を用いた古代からの習慣的な言語表現が現在まで継続されていることを考慮すると、「膝」が表す部位は、奈良時代以前には膝関節の領域を越えて、足全体にまでおよんでいた可能性がある。【用例 18】の琉球方言であるフィシャ (fis(j)a) のように、この語に酷似した「ヒザ」がかつての日本の古語として足全体を表していた可能性は否定できない。

##### 2. 膝周囲の刑罰がもたらす歩行障害

解剖学的に体のいくつかの関節を比較した場合、肩関節、肘関節、股関節などに比較して、膝関節は骨同士を組み合わせによる安定性が低く、関節の安定性は周囲の筋や靭帯によって支えられている。【用例 13】で述べたように、膝関節の前面の膝蓋骨の上部と下部にはそれぞれ大腿四頭筋（腱）と膝蓋靭帯があり、後面には、いわゆるハムストリングス（内側に半膜様筋、半腱様筋、外側に大腿二頭筋）の腱がある（図 1）。前面の筋は膝関節の伸展に、後面の筋は膝関節の屈曲にはたらく。それらを大和言葉で言いかえるならば、「アハタコスヂ」が膝関節の伸展を担い、「ヨホロ（ノ）スヂ」が屈曲を担っていたといえる。これらのどちらも切断されれば歩行ができない。詳細には、【用例 3】、【用例 8】で示した「膝筋」、「アハタコス

ズ」などの膝関節の伸筋群が切除されている場合は、歩行運動の初期の足を前に振り出す運動が不能になる。また【用例14】、【用例15】のような「ヨホロ（ノ）スヂ」である膝関節の屈筋群が切除されている場合は、着地した足を後ろに蹴り出す運動が不能になり、やはり歩行運動ができない。さらにこれらの膝関節の伸筋群と屈筋群の存在は歩行のみならず、立位の維持にも関係する。両者の緊張により膝関節の安定性が維持され、立位時の身体全体のバランスが保てるのであり、どちらかの筋が欠けても立っていることすらできない。

特に後膝部については、ハムストリングス筋群以外にも重要な構造が集中しており、深部には腓腹筋、ヒラメ筋、さらに脛骨神経や総腓骨神経なども走行している（図2）。したがって「ヨホロ（ノ）スヂ」の切断が深部にまで及ぶと腓腹筋、ヒラメ筋、さらに脛骨神経や総腓骨神経をも損傷され、前膝部に比べ、その影響は大きく、膝関節のみならず、下腿や足関節の運動にも及んでいた可能性がある。

### 3. 後膝部の膕（ヨホロ）と労働者としての丁（ヨホロ）

後膝部の「ヨホロ」という名称と、律令制における戸籍上の成人男子を示す「正丁」、あるいは労働を担う者の名称としての丁「ヨホロ」とを直接結びつける資料は明らかではないが、古代の厳しい労働によって鍛えられた「ヨホロノスヂ」は脚力やしっかりとした労働力を十分想起させる。ある仕事を担う者の名称としての丁「ヨホロ」も律令制以前の古くからあった名称のようで、古事記の仁徳天皇の条にすでに使用例がある。

#### 【用例19】 古事記 下つ巻 仁徳天皇<sup>32)</sup>

ここに大后、御綱柏を御船に積み盈てて、還り幸でます時、水取吉備國の兒島の仕丁（ヨボロ）、これ己が國に退るに、難波の大渡に、後れるたる倉人女の船に遇ひき。

養老律令には丁「ヨホロ」から派生した「匠丁」、「廝丁」「仕丁」という多様な職種を表す語の記載も認められ<sup>33)</sup>、「丁」という語は単に脚力のイメージから広がり、次第に特定の仕事に就く労働者という意味へと変化した。

### 4. 「ウツアシ」という語が示唆する膝の「内」と「外」の概念

【用例17】で紹介したように、後膝部を「ウツアシ」と呼ぶ、古代人の「内」と「外」の概念は、現代にはない概念である。現代の解剖学では、いわゆる前額面において身体の中心に近い部分を内側といい、身体の中心から遠い部分を外側と定義しており、柔道の「内股」、「外掛け」における大腿部の内外の方向と一致する。ところが、「ウツアシ」では、いわゆる膝の矢状面（前後）において後膝側を「内」と捉え、前膝側を「外」と認識していることは驚きである。現代語の「うつむく」や「うつぶせ」は頭部を前屈させたり、前方に身体を倒す運動であり、屈曲＝内（ウツ）を裏付ける用例である。

### 5. 「ヨホロ」のいう語彙の衰退

ここまで上代から中世を中心とした大和言葉による膝の周囲の各名称を概観した。特に丁（ヨホロ）という語彙は、律令制の制度の戸籍上に規定された名称であったが、律令制が崩壊し、また身体を傷つける刑罰がしだいに行われなくなると、膝周辺の構造についての関心も次第に薄れていったのかもしれない。また「丁」を「ヨホロ」と呼んでいた時代から、漢語の音読みで「チョウ」と発音するようになると、本来の身体語としての膕（ヨホロ）への連想も失われ、しだいに「ヨホロ」という語も使われなくなったのであろう。新野は、「ヨホロ」という語が消退した理由として、人々の「ヨホロ」が露出していた時代から「ヨホロ」が隠れる衣服が普及してきたこと、髪の高さが「ヨホロ」まで伸ばす習慣がなくなったこと、灸の灸点でもあった「ヨホロ」が、灸の習慣が消退したことなどを考察している<sup>31)</sup>。一方、労働者としての用語であった「丁」は、平安時代以後も残ったが、雑用係を意味する「仕丁（シチョウ）」や白装束を着て、祭りに関わる者としての「白丁（ハクチョウ）」という用語として、限られた範囲ではあるが、近代まで残った。

#### 謝 辞

本研究はJSPS 科研費 JP17K18497 の助成を受けた。本研究に利益相反はない。

#### 引用文献

- 1) 金子丑之助. 日本人体解剖学上巻. 東京：南山堂；2020. p. 351
- 2) 坂井監訳. プロメテウス解剖学コアアトラス第3版.

- 東京：医学書院；2019. p.402-403
- 3) 倭名類聚抄（元和三年古活字版二十卷本）. 東京：勉誠社；1978. p.28
- 4) 坂本ら校注. 日本書紀（二）. 東京：岩波書店；1994. p.26
- 5) 倉野校注. 古事記. 東京：岩波書店；1963. p.200
- 6) 京都大学国文学研究所編. 新撰字鏡. 京都：臨川書店；1967. p.180
- 7) 倭名類聚抄（元和三年古活字版二十卷本）. 東京：勉誠社；1978. p.22
- 8) 大西ら校注. 塵袋（1）. 東京：平凡社；2004. p.315
- 9) 坂本ら校注. 日本書紀（二）. 東京：岩波書店；1994. p.154
- 10) 広辞苑第四版, 「荆（あしきり）」の項. 東京：岩波書店；1991. p.41
- 11) 小川ら訳. 史記列伝（一）, 孫子・呉起列伝第五；岩波書店；1975. p.46.
- 12) 土生田純之. 「黄泉の国と横穴式石室」. 姫路市埋蔵文化財センター講演会講演レジュメ. 2016.
- 13) 竹内編. 東大寺奴婢籍帳. 寧楽遣文下巻. 東京：東京堂出版；1981. p.765
- 14) 坂本ら校注. 日本書紀（二）. 東京：岩波書店；1994. p.274
- 15) 井上ら編. 戸令, 律令, 日本思想体系3. 東京：岩波書店；1976. p.226
- 16) 京都大学国文学研究所編. 新撰字鏡. 京都：臨川書店；1967. p.39
- 17) 池上編. 今昔物語集 天竺・震旦部. 東京：岩波書店；2001. p.178
- 18) 金子ら編. 校注水鏡. 東京：新典社；1991. p.144.
- 19) 正宗編. 醫心方一. 日本古典全集. 東京：現代思想社；1978. p.181
- 20) 京都大学国文学研究所編. 新撰字鏡. 京都：臨川書店；1967. p.43
- 21) 大槻文彦. 言海：ちくま学芸文庫東京 筑摩書房；「うつあし」の項, 2004 p.250
- 22) 土井ら編訳. 日葡辞書. 東京：岩波書店；1980. p.31
- 23) 肥爪周二. 音韻史. In：沖森編. 日本語史概説. 東京：朝倉書店；2010. p.21
- 24) 肥爪周二. 音韻史. In：沖森編. 日本語史概説. 東京：朝倉書店；2010. p.23
- 25) 小田正博 編著. 東北身体語彙辞典. 青森：六戸中央印刷；2018. p.145
- 26) 半田一郎 編著. 琉球語辞典, fis[j]a の項. 東京：大学書林；1999. p.123
- 27) 大分合同新聞グループ編. 大分方言言語録. 大分：大分合同新聞社；2014. p.239
- 28) 前田富祺. 国語語彙史研究. 東京：明治書院；1985.
- 29) 宮地敦子. 身心語彙の史的研究. 東京：明治書院；1979.
- 30) 新野直哉. 〈膝〉をめぐる類義語の史的研究 —— 中世・近世を中心に ——. 国語学 1987；148 集：16-29
- 31) 新野直哉. 〈後膝部〉の名称について. 国語学 1989；159 集：25-37
- 32) 倉野校注. 古事記. 東京：岩波書店；1963. p.159
- 33) 井上ら編. 日本思想大系3, 賦役令, 律令. 東京：岩波書店；1976. p.261